



福音讃美歌 ジャーナル

福音讃美歌協会

新しい歌を
主に歌え

■巻頭言■

福音讃美歌協会理事長 高橋和義

新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。
主に歌え。御名をほめたたえよ。
日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。

詩篇96篇1～2節

このみことばに従い、心から主を賛美いたします。

常日頃より、私ども福音讃美歌協会の働きに深いご関心を向けてお祈りくださる主の教会、兄弟姉妹に感謝いたします。

先日、ある集会でお会いした年長の姉妹から、「新しい讃美歌集を手にして、その中からまず最初の一曲を賛美する時を心待ちにしています。」と声をかけていただきました。讃美歌集の出版を待っているとさせていただく以上に、最初の一曲を実際に声を出して賛美する時を楽しみにしていると言ってくれたことが、強い印象に残りました。実に嬉しく、力がわくのを感じました。

福音的信仰にたって作られた新しい讃美歌集の発行を目指し、はなはだ頼りがいのないこの者がしばらく前から理事会の責任を引き継いだわけですが、下準備の時期から土台作り全部まですっかりやって下さった前任の安藤能成理事長のお働きのお陰で、2011年末の発行がいよいよ現実味を帯びてきました。

ここにきて、来る11月22日に一般社団法人「福音讃美歌協会」の設立総会を開催する運びともなり、定款の作成もほぼ済みました。讃美歌委員会は、讃美歌の選曲、曲や歌詞の制作、歌詞の翻訳、楽譜の版下作成などをはじめ、数え切れないほどの細かな働きを鋭意、進めています。神学委員会は、目次や索引の吟味に力を注いでいます。それらとは別に、いったい讃美歌集の名前は何にするのかという楽しい悩みをはじめ、本として出版することに関係する多岐に渡る作業があります。著作権などをはじめとする法的な整えも大事です。さらに言えば、発行後の流通の問題、知っていただき、使っていただくための工夫、奏楽用楽譜の検討などなど、いくらでもあります。

しかし讃美歌集は、一度発行したらそれで終わりではありません。長期的に見直しと吟味を続けていくと、いずれいつか改訂あるいは新しい発行を必要とする時が来るでしょう。主が、「新しい歌を主に歌え」と言われるからです。

今はそんな先まで考えられないというのが正直な実感ですが、今も、そして次の世代の中にあっても、福音的な信仰にたつ讃美歌集をもって主の教会に仕え続けていけますようにと、心を引き締めて祈っています。

「賛美歌改訂事業の社会的および宣教的意義」

J E C A 糸井福音キリスト教会 有澤達朗・たまみ

ミエン語賛美歌改訂委員会にタイ人牧師夫人がいました。T夫人です。彼女はミエン語讃美歌を楽譜に書き表すという大きな仕事をしてくださっていました。さらにアメリカの教会の讃美歌を多数ミエン語に翻訳しました。しかし残念なことに、共に作業を進める中で二つの問題が浮かび上がってきました。力関係と重訳の問題です。

強いタイ人のミエン族に対する影響

「力関係の問題」とは、ミエン語よりタイ語が強いという状況を指します。話せたらカッコいいとか、お金儲けにつながる、社会的地位が上がる、等の心理的価値を社会言語学では「ラングエッジ・プレステイジ」といいます。「言語格付け」みたいなもの。言語格付けは隣接する諸言語との相関関係、経済力、政治力、文学や辞書などのリソースの有無などによって決まります。アメリカのミエン社会において言語格付けは上から英語、タイ語、ラオ語、ミエン語の順。タイ語話者がミエン族の委員会に属して改訂作業をしていると、ミエン族の意見が負けてしまうのです。

次に「重訳の問題」。ミエン語を知らないT夫人は英語とタイ語から通訳を介してミエン語に翻訳しました。重訳、つまり「また訳」はそれだけで原詩から遠ざかるのに加えて、タイ語の「ラングエッジ・プレステイジ」が社会的に作用し、次のような問題を起こします。せっかちに訳文を引き出したいと、つい翻訳者が自分で母語からの直訳を差し出して、「こう言うんじゃないかと思うけど、どうか？」と迫るのです。すると言語提供者のほうは、よく考えずに「それでいい」と言ってしまう。結果、ミエン語らしくない変な訳ができます。それは「タイ人の先生がそう言うのだから正しいだろう」という、プレステイジに対する恐れからのもので、ネイティブスピーカーであるはずのミエン族の萎縮という結果になってしまいます。

そのようにしてできた不自然なミエン語のままタイに持ち帰って、タイ側の讃美歌改訂委員会（1999

年8-10月）にはかったところ、ほとんどやり直しをすることになりました。

「替え歌は捨てる」

日本の演歌「北国の春」のメロディがタイ語の讃美歌になったようです。また、香港の時代劇テレビドラマのエンディングテーマはアラスカのミエン教会で讃美歌として使われています。ミエン族はきっと「北国の春」も好きはず。一般に、演歌のように「こぶし」のきいた曲がラオ人、タイ人、ミエン族に好まれます。ラオスの庶民に親しまれたメロディにミエン族が言葉をのせて讃美歌にしたものが数多くあります。

かのタイ人教師はこのたぐいの「世俗」の曲を全て捨てました。プレステイジの高いタイ語話者が主張すると、たとえミエン族の民族音楽性に反していても従わざるを得ません。彼女は「純粹主義」を通しました。

カルヴァン研究家の渡辺信夫氏は言います。「宗教改革が会衆の讃美歌を発達させたことはよく知られる通りですが、まだ会衆の歌うメロディが少なかった時でありますから、他のメロディを讃美歌に転用して、謂わば『替え歌』として讃美歌を作ることもしばしばありませんでした。ルターの讃美歌の多くは替え歌です。しかし、カルヴァンはそれをさせなかったのです。」（渡辺信夫『カルヴァンの「キリスト教綱要」を読む』新教出版社、61頁）。

ルターが第1世代の宗教改革者で、カルヴァンは第2世代として純粹性を高めたと言うことができれば、替え歌讃美歌を捨てたアメリカのミエン族クリスチャンは、教会形成において第2世代に入ったと言えるかもしれません。反対にタイのミエン族クリスチャンは、捨てられた替え歌讃美歌を復活させたことによって、教会形成の第1世代へと逆行したということになるのでしょうか？

実はアメリカ側が2001年に改訂版を出版してから僅か1年ほどでアメリカのミエン族自身から不満が出始めました。9年たった今では、アメリカからタ

イに訪問するミエン族はタイ国版のミエン語賛美歌を買って持ち帰ります。昔からの心に沁みる替え歌賛美歌はアメリカでもタイでも死にませんでした。両国のミエン族にとってインドシナ半島起源のメロディは借り物賛美歌ではなかったということです。

まとめ

1. 多言語社会で少数民族言語の賛美歌を出版することは、そのラングエッジ・プレステイジを向上させる。

2. 母語話者主導による翻訳と改訂作業が必要である。

3. 「替え歌」は、二つの意味で世俗社会との接点である。土着のメロディを借用して讃美歌の歌詞をつけることは世俗が教会に入り込む接点であると同時に、教会が世俗に宣教する接点でもある。逆の言い方をすると、土着のメロディを使用しない立場は、世俗と分離して教会の純粋性を守る方法であると同時に、宣教の機会の放棄と言うこともできる。

(続く)

連載
III

チャールズ・ウェスレー 聖餐の賛美歌

インマヌエル高津教会牧師・藤本満



チャールズ・ウェスレーの「神学」について博士論文を書くことができますか？ 残っているチャールズの著作は、数巻の彼の日記、兄ジョンの150の説教集の中的一篇。賛美歌を除くと、論説や大冊の著作はありません。賛美歌作者として有名であっても、チャールズの神学というと、果たしてそれが博士論文の対象になるほどの中身があるか？ 研究の対象となる諸作が残っているか？ が、ポイントになります。

それが立派な研究の対象となることを証明したのが、J.アーネスト・ラッテンベリー (J. Ernest Rattenbury) による、*The Eucharistic Hymns of John and Charles Wesley* (ジョンとチャールズ・ウェスレーによる聖餐式の賛美歌) でした。ラッテンベリー

は英国メソジストの賛美歌の大家です。彼は、1026曲を取めた『メソジスト讃美歌集』(ウェスレーの存命中に発行された集大成)の中で、特に聖餐式のために作られた166曲に焦点を当てて、国教会の聖餐理解、ウェスレー兄弟の福音理解を解説し、特にそれらの賛美歌からにじみ出るウェスレー兄弟特有の十字架の神学を説き明かしました。

今でも、ジョン・ウェスレーの十字架神学を理解しようとするなら、説教集や注解書から分析を重ねるだけでなく、弟チャールズが記し、兄ジョンが選曲した聖餐式の賛美歌に集中するという、重厚な課題と取り組むことになります。

私は、連載の2回目で、ウェスレーのメソジスト運動にあつては、弟チャールズの賛美歌は、兄ジョンの説教以上に、会衆の心を捉え、またその奥底に独特な響きをもって残ったのではないかと、書きました。つまり、チャールズの賛美歌はとても神学的で、福音主義の独特な響きが賛美の情感に織り込まれ、しかも時には十数節もあるのです。それを歌うことは、説教を聞くかのように、いや、福音の真理を自分の口で歌うことはそれ以上の効果があつたに違いないと。

様々な種類の賛美歌の中で、最も神学的な響きをたたえていたのは聖餐の賛美歌でした。言うまでもな

く、十字架の神学です。ウェスレーは野外説教だけでなく、説教の最後に聖餐式を行うことがしばしばありました。すると、英国国教会（聖公会式）の聖餐式ですから、何百もの聴衆が聖餐を受けるために司祭ウェスレーの前に並びます。何時間もかかります。その間、十字架の賛美歌を歌いながら、野外に集まった群衆は、自分の罪を悔い改め、そのために流された主イエスの血潮に感謝し、救いの経験を新しくし、献身を更新して、聖餐を受けるために心を備える、それは、教会歴史の中でも希に見る現象だったのではないのでしょうか。

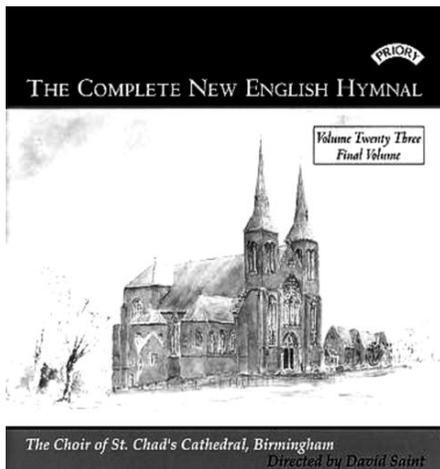
これほど長い聖餐式も希であったに違いありません。しかし、陪餐する人びとが賛美歌を歌うことによって、自分の口で告白し、聖餐に込められた十字架の贖い、復活の事実、天国への希望をゆっくりと時間をかけて歌い進んでいく、またそれが一人ではなく、大勢の会衆と共に歌い進んで、聖餐にあずかります。

時間を気にする現代の私たちには想像できない光景かもしれません。しかし、聖餐式の賛美歌の歌詞に込められた重厚な福音の真理、それを歌う会衆の信仰、前で一人一人を待って、聖餐の恵みを与える司祭、その姿に少しでも自分たちを重ねてみると、恵みの意味もまた深まることでしょう。

CD
紹介

THE COMPLETE NEW ENGLISH HYMNAL Volume 1-23

Priory Records LTD



今日では大作曲家や名演奏家の数十枚組のCDセットは珍しくありませんが、今回紹介するのは、他に類を見ない全23枚の讃美歌CDシリーズです。

このシリーズには、今も世界中の聖公会で用いられている讃美歌集 *New English Hymnal* (1986) に収められている542の讃美歌が全曲収録されています。*New English Hymnal* の前身である *English Hymnal* (1906,1933) は、英国の高名な作曲家 Ralph Vaughan Williams (1872-1958) が音楽編集者として関わったことでも知られ、内容的にも高い評価を受けています。讃美歌学者の Erik Routley は *English Hymnal* について「英語讃美歌に新しい生命を吹き込んだ」「教養の高いハイグレードな音楽」と評しましたが、*New English Hymnal* は、その水準と方針を保ちつつ、より時代に適合した讃美歌集として

編集されました。内容的にはヒム・エクスプロージョンの流れとは一線を画しており、あくまでも *English Hymnal* が生み出した良き伝統の中での刷新と言えるでしょう。その姿勢は、もう一つの聖公会の主要な讃美歌集である *Hymns Ancient and Modern* (1861-) が、1983年の *New Standard editin* において、過渡的な編集方針とは言え Fred Pratt Green、Brian Wren、Fred Kaanといったヒム・エクスプロージョンの担い手たちの作品を多く採用して内容を一新したのと対照的です。もっとも *Hymns Ancient and Modern* の最新版である *Common Praise* (2000) では、Wren と Kaan の作品はその数を大きく減らし、より福音的な Jubilate Group の作家たちの作品が多数作用されるようになりました。

さて、このCDの演奏は、英国各地のよく訓練された教会付属の聖歌隊とオルガニストによるもので、そのレベルの高さには驚かされます。聖歌隊の声、オルガンの音、カテドラルの響きは、各巻ごとに異なりますが、全巻を通して同じスタッフによる録音なので、響きに統一感があり安心して聞くことができます。各巻毎の収録曲は順不同で、降誕、受難、復活といった統一主題が設定されているわけでもありません。言い換えれば、どの巻にも偏り無くいろいろな主題の讃美歌が収められています。(な)

教会音楽セミナー in 大阪 報告 (2010.6.11.金)

去る6月、大阪の近畿福音放送伝道協力会において、福音讃美歌協会主催、第10回教会音楽セミナーが行われました。プログラムは、主題講演の後、『あたらしい歌』から数曲を選んで共に讃美し、パネルディスカッションを行いました。準備委員の安西幸男師が講演と発題の内容をまとめてくださいました。

●主題講演「礼拝における讃美」 中山信児師 (日本福音キリスト教会連合 菅生キリスト教会牧師)

礼拝のための讃美歌集を作ろうとするとき、礼拝のあり方によって求められる讃美歌、讃美歌集は変わってくる。日本の福音派の礼拝について学び、その求めを汲みとる作業のまとめとして、昨年『礼拝における讃美』を出版した。二十数年前には日本語で読める礼拝学の本は殆どなく、他の教会でどんな礼拝をしているのか情報は乏しかった。しかし近年状況は変わり、多様な形の礼拝に気づかされてきている。それぞれ継承してきたものを大切にしながら、主の御心の広さ、許されている多様性の豊かさを受けとめたい。その中で、礼拝讃美に求められていることは、集っている皆が心を合わせて歌えるということ。公同性を保ち共に心を合わせられるもの。讃美歌の源泉にあるみことばの真理がよく分かること。もう一つ、口語化の課題。あらゆる年代の人が歌えること。美しく分かりやすく歌いやすい歌詞。文語も理解できるものであればその美しさを残したい。音楽面では、歌いやすい旋律、覚えやすい旋律は心を合わせて歌うために大切である。福音の真理を堅持しつつ、教会の多様性を大切にしたい。

パネルディスカッション

●発題1 要旨 吉川幸雄師 (日本アドベント・キリスト教団 あすか野キリスト教会牧師)

新しく編纂される讃美歌集に一牧師としての希望を述べたい。第一に、礼拝の中で本来の讃美、神また主イエスとその御業をほめたたえる讃美が少ないと感じている。途中で讃美が祈りや願いに変わってしまうものが多い。本来の讃美とそれにふさわしい勢いのあるメロディーを望みたい。第二に、公同礼拝にふさわしい歌詞を望む。礼拝讃美は私たちの「公同讃美」である故に、「われら」と歌って共同体としての意識を育みたい。第三に、説教後の応答の讃美を充実させて欲しい。第四に、ドイツ・コラルや北欧等の名曲には、歌詞が福音的で深いものがあるので多く収録されることを望む。第五に、翻訳歌詞の限界。翻訳とオリジナルの歌詞があまりに違うものがあるので、原意が分かるような配慮を望む。最後に、滝廉太郎など日本人に親しまれているオリジナルのメロディーも取り入れていただきたい。

●発題2 要旨 安西澄江師 (福音交友会 昭和聖書教会奏楽者 教会音楽家)

歌い出しをはっきり示して会衆が一致して歌えるよう導くことは、奏楽者の役割のひとつである。会衆の讃美が一つになる助けとして奏楽がある。奏楽者の心得として、奏楽者である以前に良き礼拝者であること。みことばを学び積極的な奉仕をしていただきたい。次に実践のために、奏楽に使う楽器を良く知ること。それから讃美歌のメロディーをきちんと提示すること。教会の事情によってはメロディーだけの奏楽であっても可。また、ぜひ歌いながら弾く訓練をして欲しい。そうすることで会衆と呼吸やプレスが合ってくる。全節を歌えばテンポも決まる。歌って気付くのがことばのアクセントの節によるずれや楽譜上のプレスとことばのプレスとのずれ。ぜひ「ことば優先」の奏楽を。最後に、神様から教えられやすく、牧師から教えられやすくあることが成長に繋がる。牧師への要望として「讃美は音楽だから分からない」と言わないでいただきたい。この世で唯一神様に讃美をささげるのが教会。牧師は神様をほめたたえる専門家として讃美とは何かを、教会に教え続けていただきたい。

今回、準備委員として御奉仕して下さった方々のお名前を記して感謝に代えさせていただきます。

安西幸男師 (福音交友会 昭和聖書教会)、大兼久芳規師 (インマヌエル綜合伝道団 王寺キリスト教会)
辻喜男師 (福音交友会 西大和聖書教会)、吉川幸雄師 (日本アドベント・キリスト教団 あすか野教会)
吉村和記師 (インマヌエル綜合伝道団 京都西キリスト教会)

❖ INFORMATION ❖

♪ 恵みシャレー・福音讃美歌セミナー

「讃美歌とミュージカルを巡って」

- 日時：11月2日【火】～3日【水・祝】
- 場所：恵みシャレー（軽井沢） <http://www.wlpm.or.jp/mck/>
- 講演：井上義（日本同盟基督教団 等々力教会牧師）
- 讃美：佐渡寧子（ソプラノ）
- 一泊三食 15,000円
- お問い合わせ：恵みシャレー Tel.0267-42-2302 e-Mail mck@wlpm.or.jp

♪ 福音讃美歌協会 一般社団法人設立総会

- 日時：2010年11月22日【月】17:00から
- 場所：いのちのことば社
<http://www.wlpm.or.jp/info/index.htm>

♪ 福音讃美歌協会 奉仕者祈祷会

- メッセージ：石川弘司（日本同盟基督教団 中野教会牧師）
- 讃美ゲスト：ピョン・ホギル（テノール）
- 日時：2010年11月22日【月】19:00から
- 場所：いのちのことば社
<http://www.wlpm.or.jp/info/index.htm>

♪ 法人設立に伴い福音讃美歌協会の住所が変わります

新しい住所：〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 602号室
連絡先の電話とメールアドレスには変更ありません。

♪ 讃美歌についての集会を企画してみませんか。

礼拝説教、伝道会、修養会、讃美についての学び、音楽奉仕者の研修や講習などに、福音讃美歌協会の理事、讃美歌委員を派遣いたします。ぜひお招きください。

- ・日程、内容、講師等について、ご希望をお知らせください。
- ・当方で調整の上、改めてご連絡させていただきます。
- ・福音讃美歌協会の働きについて紹介と報告をさせていただければ感謝です。
- ・お問い合わせ：info@jeacs.org

♪ 「福音讃美歌ジャーナル」投稿募集

福音讃美歌協会の働きへのご意見、ご希望、讃美についての思い、教会での取り組みの紹介など、皆様からの投稿をお寄せください。

- ・原稿は600字以内。
- ・電子メールにテキスト書類を添付し、住所、氏名、電話番号、所属教会を明記の上、福音讃美歌協会（info@jeacs.org）までお送りください。
- ・次号（2011年4月発行予定）掲載分の締切は、2011年2月末日です。
- ・掲載誌の発送をもって採否の発表に代えさせていただきます。

＊会計中間報告＊

2010年4月-9月

■収入の部■

科 目	2010年度予算案	2010年度実績
会員負担金	1,310,000	690,000
正会員	750,000	500,000
準会員	60,000	0
賛助会員	500,000	190,000
自由献金	400,000	105,900
その他	0	102
当年度収入合計 (A)	1,710,000	796,002
前年度繰越金	595,811	595,811
収入合計 (B)	2,305,811	1,391,813

■支出の部■

科 目	2010年度予算案	2010年度実績
理事会費	60,000	22,587
委員会費	370,000	202,598
人件費	280,000	140,000
事務費	100,000	35,244
ジャーナル発行費	380,000	191,490
カンファレンス開催費	200,000	104,155
総会開催費	40,000	26,831
JEA関係費	35,000	35,000
予備費	150,000	0
当年度支出合計 (C)	1,615,000	757,905
当年度収支差額 (A) - (C)	95,000	38,097
繰越額／残高 (B) - (C)	690,811	633,908

【賛助会費納入者】 (2010年4月-9月)

栗橋キリスト教会、栄福音キリスト教会、菅生キリスト教会、世田谷中央教会、浜田山キリスト教会 (5教会)

石川岩夫、石川弘司、岩下シノブ、大島章義、大滝忠子、神谷聰子、斎藤とし子、斎藤眞木子、高橋和江、竹中久三・節子、田村勉、辻喜男、三木智枝子、横倉知恵、匿名 (15件)

【献金者】 (2010年4月-9月)

泉キリスト教会、川越聖書教会、川越聖書教会教会員、こどもの国キリスト教会、長津田キリスト教会、浜松中沢教会、東村山キリスト教会、武蔵台キリスト福音教会、石田美子、中山信児、関西セミナー集会献金、匿名

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール (info@jeacs.org) で、その旨をお知らせください。

ハレルヤほうや

by yukinko



詩篇 150:6

福音讃美歌協会・会員募集

◇会員の種別は、以下の三種類です。

正会員（教会・教団・教派等）、準会員（超教派団体・グループ等）、賛助会員（趣旨に賛同し支援してくださる教会、個人等）

◇賛助会員のお申し込みは、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵送またはFAXでお送りください。承認後、年会費のお振込みにより入会が完了致します。

◇正会員、準会員のお申し込みにつきましては、協会へ直接お問い合わせください。

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127

名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座（ばるる）◆

番号 10500-82654721

名称 福音讃美歌協会

◆銀行口座◆

みずほ銀行 ユーカリが丘支店

普通預金 口座番号 1604668

名称 福音讃美歌協会

福音讃美歌協会 JEACS

Japan Evangelical Association for Congregational Singing

〒190-0022 東京都立川市錦町2-1-21

立川駅前キリスト教会内

事務局〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-44-12 小林方

ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org

From Editor

編集後記

「後で後悔する」という表現があります。これは、人によっては気になる日本語の一つです。「後悔」は「後になって悔やむ」ことだから、「後で」を付けると「馬から落馬する」と同じで重言になり、間違いだというのです。文化庁が05年に行った「国語に関する世論調査」によると、この表現が気になる人は41%。気にならない人は54%でした。年齢別に見ると16～19歳では気にならない人が83%ですが、年齢が上がるにつれて気になる人の比率が増え、60歳以上では気になる人の方が多くなります。多分、16～19歳の人には、この表現を嫌と言うほど聞かされているのだと思います。「勉強しない」と、後で後悔するぞ」という言い回しで。

流行語の類はともかく、今、若い人が気にしていない表現の多くは今後10年、20年の間に日本語として定着していくでしょう。その変化の中には、今まで気にしていた人たちが、だんだん気にしなくなるという変化もあるでしょう。いずれにしても、言葉は変化するものです。どのように変化するか、どの程度変化するかは予測できませんが、讃美歌集を編集する時に、このような変化についても考え、「後で後悔」しないように備えたいものです。

(な)